

Title	オンライン授業を巡る諸問題 : 2020 年度共通教育科目の実践から
Author(s)	相場, 美紀子
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81429
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

オンライン授業を巡る諸問題

—— 2020 年度共通教育科目の実践から ——

大阪大学共通教育機構 非常勤講師
相場美紀子

はじめに

本稿は 2020 年度の授業実施状況に対する忘備録である。筆者は大阪大学の共通教育機構において外国語学部以外の学部生を対象に、中国語(国際コミュニケーション演習など)の科目を担当している。想定外の事態によって、当初前期のみの予定だったオンライン授業は通年に切り替わった。一連の状況を振り返り、今後の課題について検討したい¹。

1. 前期の状況 (1, 2 セメスター)

新年度が始まる直前にオンライン授業が決定した。加えて、キャンパスカレンダーの予定よりも数週間遅れてのスタートとなった。大学側は希望者対象に遠隔授業の講習会を事前に告知していたようだが、非常勤講師である私が知ったのは NHK のローカルニュース番組を視聴しているときだった²。マルチリンガルセンターの担当教員から授業運営について記した PDF を添付したメールが連日届いた。文面から担当者間で様々な議論が重ねられていることがうかがわれた。担当科目である中国語の専任教員からも外部で無償提供しているウェブ教材の案内をまとめたメールも届くなか、基本的に担当者の裁量に任せるという従来の方針に変化はなかった。

思いがけない形で授業形態の変更が余儀なくされたが、筆者にとってオンライン授業は今回が初めてではなかった。数年前、ある大学が通信学部を立ち上げることになり、オンライン授業を担当した。その時は半年間にわたって選任の職員と綿密な打ち合わせをしながら教材と台本をまとめ、1 回の授業ごとに専用スタジオで撮影を行った。受講生に配信されるのはプロの手で編集されたデジタル教材で、受講生からの質疑並びに課題提出はすべて専用の通信システムを通して行われた。いわばすべてお膳立てが整った状況での授業だっ

た。受講生に至っては社会人や別の大学を卒業して 2 回目の大学生活を送っている受講生が大半で学習意欲が高く、加えて職員のフォローも万全だった。その時の記憶もあって、オンライン授業についてはさほどの戸惑いはなかった。それよりもむしろ、履修登録をした受講生が今回の原因にかかわる国の言語を学ぶモチベーションを持ち続けられるのか気がかりであった。

《前期の実施状況》

当初は外部の状況を見ながら段階的に対面授業に移行する、つまり短期的な措置だったので、ZOOM は使わず CLE で資料配布と小テストを実施することにした。その理由は以下の通りである。

- ①1 科目を除く担当科目すべてが受講生 50 名を超えている。
- ②原則 1 科目を除いてすべて新入生を対象とした科目である。

理由①については、実際の教室で行う授業よりも目配りがしにくい点が挙げられる。加えて初めて学ぶ外国語の授業において発音の習得は必須で、教室で実施していた方法をそのまま ZOOM で再現できるか不透明であり、従来の方法では習得が非効率かつ困難と思われたからである。もうひとつは、想定外の事態が発生した時の対応が未確立である状況において、受講生の映像が画面に出ることに不安を感じたからである。新入生が大多数を占める科目なので受講生たちは面識がなく、杞憂かもしれないが個人情報流出の可能性への配慮と考慮、当面は ZOOM を使わず資料配布のみで授業を行うことにした。

《授業方法》

資料配布では CLE を利用した。CLE とは授業支援システム (Blackboard Learn) の通称で、大阪大学全学で利用できる授業支援のためのプラットフォームである³。CLE には資料公開、掲示板、メールなどを使える機能があり、非常勤講師もオンライン授業実施期間はメールの送受信ができることになった。それでも対面授業と異なる問題が生じた。

(1) 教科書の遅配

例年であれば受講生が各自生協で教科書を受け取るが、今回は学生の住所に送付することになった。その作業の遅延などで授業開始になっても一部の学生の間で教科書が手元にないという事態が生じた。さいわい、各教科書出版会社のご厚意で教科書の一部を

PDF などの形式で一時的に対応することができた。筆者もかねてから交流があった出版社の編集者に個別に連絡を取り、迅速に対応してくださったことで教科書がない状況を免れることができた。

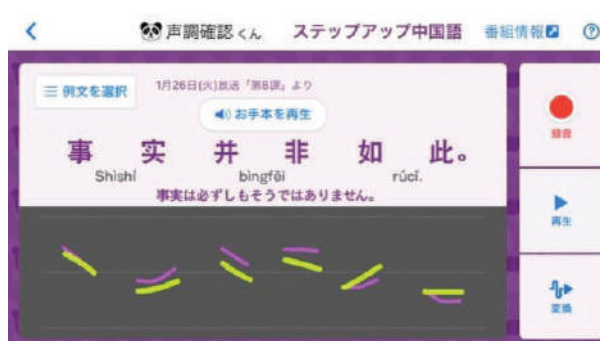
(2) 声調確認くんの活用

ZOOM で授業をした場合でも 50 名を超える受講生相手では、個別の発音指導は例年以上に行き届かないことはあきらかであった。これまでも録音した自分の音声を再生して発音確認する方法があったが、入門者が独習の形で自己の発音を矯正することは容易ではなく、今後の習得にも影響が及ぶ。とく中国語の習得では初期段階で声調の体得が肝要とされる⁴。その一助として、今年度は NHK 語学番組の補助教材「声調確認くん」を活用した。

声調確認くんは NHK の語学講座アプリで、自分が発声した声調を視覚で確認できるサービスで、無料アプリでダウンロードできる。紹介ページには「(1)放送毎に新しい練習文が追加、(2)声の高さの軌跡を音節区切りで表示、(3)お手本となる練習文の音声は男女それぞれに用意、(4)正しい声調が自分の声で聞ける」といった特徴が記載されている。とくに(4)は、音声の視覚化は自主学习に大いに役立つとされてきたが、それが無料で手軽に行えることは画期的といえる。

声調確認くんは以下の手順で行う。①例文を確認する②お手本を再生する③録音をクリックして発音する④再生をクリックして自分の発生した軌跡とお手本の軌跡を比べ、重なるまで繰り返す。この教材の利点は①見本の線に重なるほど規範的な発音であることが目視で判断できる、②録音は納得がいくまで繰り返しできる、③再生ボタンをクリックすると自分の音声を聞くことが確認できるなどの点が挙げられる。

声調確認くんを用いて、担当したすべてのクラスで「こんにちは」「ありがとう」などの定型文を指定してその練習した画像を各自スクリーンショットして提出してもらった課題を出した⁵。受講生からは「自分の発音した音声が目に見えるのでわかりやすい」、「もっとほかの例文で練習してみたい」といった感想の声が寄せられた。提出者のスクリーンショットは概して練習の跡がうかがえた。また、第 2 声と第 4 声の波形が単調で高低差が少ない、第 1 声の音域が相対的に低いなど、抑揚が乏しいとされる日本語母語話者特有の発音傾向が如実に反映されていた。



図：音声確認くんの使用例

(3) 小テストの実施

受講生の習得度を把握するために教科書に沿った内容で CLE のテスト機能を利用して毎回小テストを作成して実施したところ、問題作成の方法次第では通信添削のように一人ずつ採点、コメントを記載することになり、一斉に情報を伝達できる対面授業に比べてはるかに労力を費やすようになった。丁寧な対応が必ずしも好意的に受け取られることもなく、受講生からの反応は想像と異なった。受験を経てキャンパス生活を体験しないまま大学生になったからとみなすのは短絡的かもしれないが、受講生は点数への固執は想像以上だった。たとえばある小問の解答が違うから採点調整しろという乱暴な文体のメールや、小テストの成績がほぼ満点なのに成績評価に反映されていない理由を示してほしいというモノログ文体のメール、果ては期末テストの解答を開示しないで成績評価をするのはおかしいといった指摘が教務課経由で寄せられた。これまでの対面授業では遭遇したことのない反応である。面識のない相手の対応が彼らの不満を増長させた可能性もあるが、こうした受講生の心理状況などについては今後の調査分析が待たれる。

授業担当者としての配慮不足を猛省する一方で、こうした状況が発生した背景の一つには他の受講生との比較ができない環境も起因すると推量される。通常の授業であれば、生育環境の異なる者同士が教室という空間に定期的に集まって同じ目的をもって学び、情報の交換や共有をしながら関係を深め、自己と他者の相違や相手との距離感や間合いといったものを肌身で感じ取れる。しかし、資料配布だけで学習する環境では受講生は自己を客観視するのが容易でないことが、今回の授業を通して示唆された。

2. 後期の状況 (3, 4 セメスター)

《ZOOM の導入》

後期もオンライン体制が継続されたことから、他の語学担当者の意見や前期の経過を踏まえて後期の担当授業は一律 ZOOM を利用した。

ZOOM は無料サービス分が利用できたが出席者の集計などのサービスは使えなかったもので、従来の対面授業と同様、出席点呼を兼ねて毎回可能な限り受講生を指名した。授業運営では毎回分の資料を PDF で CLE に期限付きで公開し、板書の代わりに共有画面においてワード文書を用いて補足説明を行う形式とした。

ZOOM は①受講生の表情や口元がはっきりわかる、②情報伝達の公平性、③ピンインの重要性が示せるといった長所が挙げられる。①については、マイクを通しているので指名した学生の応答が聞こえやすい。逆に言えば、担当者も大きな声を出さなくても声が届く。しかし、画面(マイク)から顔を横に向けて受講生の名簿を見ながら指名するときに、こちらの声が聞こえなかったので返事ができず欠席扱いになったと主張する受講生がいた。②は教室の後ろ側では板書の字が小さくて見づらいが、共有画面を用いると黒板で板書するよりも手早く公平に情報を伝達できる。そのうえ、担当者も受講生も互いに声が小さくても音声クリアに届く。また、③のピンインは中国語における「かな」に相当し、アルファベットで表記する。パソコンなどの文字入力ではピンインが不可欠で、ピンインを覚える作業は地味で単調で敬遠されがちだが、共有画面においてピンイン入力をしてそれが漢字に変換されるプロセスを実演できたことで、ピンインの重要性を示せたという点でも共有画面が果たす役割は大きかった。

《ZOOM の問題点》

ZOOM はオンライン授業を円滑に進める手段であることが確認できた。一方で、①便宜性がもたらす緊張感が欠落しがち、②一体感、統一感が希薄であるといった問題が見られた。

まず①だが、教室での授業は回を重ねるごとにクラス特有の雰囲気や一体感などが次第に形成されるが、オンライン授業では弱まる傾向にあった。後述する「中国語初級」という履修生が 15 名前後の少人数の授業では指名した受講生が笑ったり、発言中に質問をしてきたり、他の受講生を意識した面白い発言をしてほかの受講生も反応して笑顔を見せるといった光景がしばしば見られたが、50 名を超える授業ではそのような一体感がある反応はごくまれであった。その理由の一つにペアワークの欠如が考えられる。教室では一斉にペアワ

ークができた。担当者として客観的に見ても、授業を通して人間関係を深める受講生も少なくなかった。とくにペアワークで協力して会話文を作成する作業をすると、さらに親和性が高まっていった例は数多くある。しかし、オンラインの環境では受講生間のいわば横のつながりを構築することは難しい。それは技術的な問題もさることながら、映像でのみ面識のある相手ゆえの隔たりといった点も考えられる。ただし、外国語会話スクールなどでは以前からオンラインでのグループレッスンが行われて一定の支持を集めていることから、別途検証分析が必要である。

便宜性がもたらす弊害も看過できない。例えば授業のレジメは二週間程度に期間を限定して公開していたが、ダウンロードをし忘れたので再掲示してほしいといった声は何回か寄せられた。レジメは従来の板書に相当する。板書は事前に配布することも授業後も閲覧できるものではない。こうした受講生の対応から、CLEの便宜性が常態化してしまうことで、対面授業が再開した際に順応できるのか懸念される。

《ハイブリット科目「中国語初級」》

ここで「中国語初級」について言及したい。2020年度から開講した科目で、「中国語初級Ⅰ」は後期始まり、「中国語初級Ⅱ」は前期始まりの形をとる。再履修科目と第3外国語(第2外国語履修者は履修不可)の受講生を1つに集めたクラスで、ⅠまたはⅡのどちらか半期だけ履修してもよい。

当該科目は積極的に外国語を習得する意欲が希薄な受講生や逆に実践的な学習を望む受講生が履修すると予想された。ただ、ちょうどオンライン授業の時期に開始となったこと、再履修科目と第3外国語の履修コードがそれぞれ異なること、所属学部によって単位認定されない点などの要素が重なって、本来ならば、授業開始時に教室で直接対面した時に受講希望者に伝達できる情報も今年度はすべてオンライン経由になり、履修登録の際に受講生に混乱が生じないように教務関係者から念を押されていたが、コード登録表示の不備なども相まって受講希望者からは自分が単位を取得できるのかと問い合わせが相次いだ⁶。こうした反応から再履修者ですべて占められると思われたが、授業開始時の履修者の内訳は既修者と初修者は意外にもほぼ半数の割合だった。

初級のクラスでは学習者の習得レベルはゼロまたは入門相当だが、当該科目は習得のレベルも目的も異なる。当該科目は初年度ということもあってシラバス作成時は教科書を指定せず、開講後に履修者の状況に応じて教材の配布を予定していわゆる双方向型の授業を予定していた。さらに、既修者と初修者が混在する特性を生かして、発音練習などで既修者は初修者のサポートをしてもらうことを検討していた。さらに会話作成のペアワークを予

定していた。おりしも前期の期間は会話の教科書を執筆していたので、初稿のスキット(会話文)を当該科目で提示して受講生の意見や反応を原稿に反映できると画策していた。しかしこの目論見もオンライン授業によって無に帰した。

回避策として、この授業では開講時に①履修の目的、②学習したい内容、③目標などの設問でアンケートを行い、彼らの要望に基づき「あいさつなどの簡単な表現」、「旅行などで使える慣用表現」に特化した内容で授業を行うことにした。文法よりも単語やフレーズの発音に比重を置き、少人数の利点を生かして毎回最低 5 回は指名し、二人一組でやり取りする時間を設けた。また、再履修者には発音への苦手意識がある声が少なくなかったものの、早口言葉(绕口令)を用いた会話テストを告知した際は、授業が終了してなおも画面上に残って何度も練習する受講生が複数現れた。

3. 問題点と課題

第 2 外国語科目という限定された範囲であるが、オンライン授業と外国語学習の親和性には一長一短があるというのが 1 年間を通じて得られた印象である。

まず環境面であるが、大学側から提供された 2 つのシステムは現段階では十分なツールといえる。ただ、CLE のテスト機能は複数のクラスで同一の教材やテストを行える機能があるが WinZip がないと活用できず、結果的に一つずつ入力して対応する必要があった。設問形式も番号選択肢問題や正誤問題は自動的に採点できて非常に便利であるが、記述問題や穴埋め問題は結果的に目視で再確認して訂正する必要があった。また、対面授業では期末テストの点数を公開する義務がないが、CLE は公開できる機能があり、こちらで非公開を選択していても「点数を公開しないとは何事だ」という激しい文体のメールが教務課経由で届いたことがあった。

ZOOM サービスの基本機能は無料で利用でき、大学のアカウントも期間限定で設定できた。ただし、アップグレード機能は自己負担する必要があった。その他享受できるサービスがあったのかもしれないが、取りこぼしていた可能性もある。

オンライン授業では送り手の環境が授業の質にそのまま反映される。パソコン、アクセサリなどのハード面の不備に加えて CLE や ZOOM の習熟度などの原因で、十分なオンライン授業を提供できたとはいえない。一方で、今回の事態を招いた元凶となった国の言語にもかかわらず、制約のある状況にあっても最後まで耐えた受講生の学習姿勢には感服する。

《授業運営における問題点》

ZOOM 導入による受講生の授業参加にかんする問題点についても言及したい。自宅ないしは自室にいるせいか、教室では考えられないような行動が見られた。

【ZOOM 利用時に見られた受講生の問題行動の一例】

内容	件数(延べ)	備考
Wi-Fi の電波状況が悪い、パソコンの故障で授業が受けられなかったとメールで事後報告	10 件以上	報告時間に応じて遅刻・欠席扱い
電話をしていたがミュートが解除して通話内容がクラス全体に漏れ聞こえた	2 件	欠席扱いとして処理
指名時に「移動中なので教科書が開けない」と答える	3 件	欠席扱いとして処理
指名時にちょうどインターフォンが鳴って宅急便を受け取りたいと申し出た	1 件	
指名時に映像が中断した。家族が電子レンジを使用していたと事後報告がある	1 件	

上記は問題行動の一例だが、とくに取り決めがないためこちらの判断で処理した。一方で熱心に取り組む受講生も一定数存在した。対面授業時よりも質問を受ける回数が圧倒的に多く、授業時間後に一時間近く対応することもたびたびあった。このほか、大学の開放教室で受講している学生は指名しても発言がはばかれる環境にあるといった問題は担当授業でも見られ、それぞれの受講環境に配慮する必要がある。

《中国語学習における問題点》

オンラインでの中国語学習について、以下の問題点が挙げられる。

(1) 文字入力

中国語は初級文法が学習しやすい言語、漢字を使っているので理解しやすいといわれる。対面式の授業においてとくに指定がない限り受講生は、練習問題や試験は漢字(簡体字)で解答していた。ところが、オンライン授業での試験は文字入力の際にピンインが必須となる。先にも触れたが、音声は別として中国語は通常ピンインで入力する。このため、受講生は簡体字のほかにピンインの習得も必要になる。長期的な展望をもって中国語学習を考えているならいざ知らず、初級の段階では簡体字を書けてもピンインま

で覚えるのは時間的にも限度がある。ZOOM のホワイトボード機能を使えば受講者に書いてもらうことも可能だが、50 名を超える受講生を相手にする場合は非効率的であり、オンライン授業が継続する場合はより効果的な方法を今後も模索する必要がある。

(2) 発音練習

対面授業では可能だった教室を巡回しながらの発音チェック、発音テストも、オンライン授業になると相対的に制限された。加えて筆者のパソコン環境では教材の音源資料を有効活用できず、代替策として前述の発音アプリの声調確認くんを利用したものの、教科書の表現がない、練習できる用例数が少ないといった問題点から、今後オンライン授業を担当する際は地震の環境改善ならびに担当授業に沿った音声資料の提供を検討する必要がある⁷。

(3) 問題演習

従来の対面式授業では教科書以外にも、受講生の習得状況に応じて参考資料や問題をプリントの形で配布していた。問題演習では教科書の練習問題や別途配布した練習問題を解答してもらい、得点制で自主的に板書してもらう形式をとって、成績評価の一部にしていた。

オンライン授業では事前に授業レジメを配布していたが相対的な進捗は対面授業よりも遅くなり、解説も通り一遍の内容になりがちだった。この理由については現時点ではまだ解明できていないため、今後の課題としたい。

おわりに

「同じ釜の飯を食う」という慣用句はオンライン授業にはあてはまらないかもしれない。ただ、資料配布のみの授業と ZOOM を導入した授業を行った経緯を踏まえると、たとえデジタル媒体を介しても互いの顔(視覚)や声(聴覚)を認知できることで、受講生の不安感はある程度軽減された印象を受けた。皮肉なことに ZOOM は中国人エンジニアが開発したと聞かすが、このシステムがなければオンライン授業はいっそう混迷をきたしただろう。

オンライン授業を経験したことで、改めて対面授業の持つ利点を確認した。精神科医の斎藤環氏は「親密になるということは体液を交換しているのだ。エアロゾルを交換し合っている」と対話の重要性を説いている⁸。古くから人間は文通などの手段で離れた場所にいる他

者と交流を保ってきたが、手紙や電話などはあくまで補助的な道具にすぎない。人間同士の真の交流は同じ空間にいて五感を駆使して初めて成立する。齋藤氏の指摘は非言語コミュニケーションの果たす役割の大きさを再認識させるものであり、今回担当した科目にも重なる部分が少なくない。今後は授業を通じて外国語習得における非言語要素がもたらす影響についても検討したい。

註：

¹ これまで幾度となく投稿や発表の機会を与えてくださり、今回の投稿をご快諾くださった大阪大学 CO デザインセンター教授林田雅至先生に衷心より御礼申し上げます。

² NHK「ニュースほっと関西」(18:10～19:00) 2020年3月30日放映分

³ https://www.cmc.osaka-u.ac.jp/?page_id=6184

⁴ 四声ともいう。中国語(北京語をもとに作られたいわゆる標準語)には4種類の声調があり、それぞれ第一声、第二声、第三声、第四声と呼ぶ。

⁶ たとえば、身体的な事情から特別な配慮が必要な受講生から履修希望があったので急ぎ当初予定していた授業内容を見直した。しかし、所属学部の規程で単位として認められないことが分かったと当該学生は履修を取り消した。

⁷ 朝日出版社は発音教材『快音』を期間限定で無料配信した。相場他(2020)は指導に役立つネット上の技術例として、中国語ネイティブではない教授者が中国語文をチェックする際に参考にできるもの：Google 翻訳、会話文の音声を作成する際に役立つもの：Sound of Text, Text to Speech, オンライン授業などで、ビデオの形で提出させる際に役立つもの：Flipgridなどを挙げる反面、あくまで教授者向けであり学習者に安易に紹介すべきでないとした。

⁸ ハートネット TV「インタビューシリーズ『[コロナの向こう側で\(2\)～齋藤環さん～](#)』(Eテレ 2020年6月2日放送)

《引用文献》

- 相場美紀子・曹櫻・曹偉琴著(2020)『まちかど中国語』白帝社